Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	歴史を生きることと、裁くこと : 朝鮮人作家・兪鎮午の生涯
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	すばる,30(2):232～238
刊行日 Issue date	2008-02
資源タイプ Resource Type	Article / 一般雑誌記事
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLCDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90000490

PDF issue: 2018-11-21

歴史を生きることと、裁くこと：朝鮮人作家・兪鎮午の生涯

中国や韓国との間の歴史問題。沖縄における集団自決を巡る激しい議論。ある人々は、過去の特定の人々を挙げて非難をし、また、他の人々は、同じ事件や人々を、諸手を挙げて賞賛する。「歴史」は我々にとって、常に悩ましい。

しかし、そのような時、常に思う。我々には果たして、過去の人々を「裁く」しかくなどあるのだろうか。そして、そもそも我々は彼等について、どれほど本当に知っているのだろうか。

例えば、この朝鮮半島の人物はどうだろう。彼が朝鮮半島社会に、忽然と登場したのは、ある一九二四年、朝鮮半島で行われた「模擬試験」の結果によってであった。「模擬試験」が日本統治下真っ只中の朝鮮半島にもあった、と言うと、読者は少々驚かれるかもしれない。その名も「第一回大学予科高等学校入学模擬試験」。ソウル市内の中学校と高等普通学校という二種類の学校の卒業予定生を対象に行われた試験であった。現在風に言えば、「第一回大学進学ソウル市内高等学校統一模擬試験」とでも言えようか。

しかしながら、この模擬試験は、筆者が個人的なつまらない哀愁と共に思い出す模擬試験などとは、訳が違った。まず、中学校と高等普通学校という、異なる名称を持った学校が参加したことからもわかるように、当時の朝鮮半島には、二種類の中等教育機関が存在した。両者は、形式上は言語を基準にして分けられていた。一つは、「国語を常用する者」為の学校、即ち、中学校であり、もう一つは「国語を常用しない者」の為の学校、つまり、高等普通学校である。とはいえ、実際には、「国語を常用する者」が日本人を、そして、「国語を常用しない者」が朝鮮人を意味することは明らかだったから、当時の朝鮮半島における中等教育は、民族別に行われていたことになる。因みにこのことは初等教育においても同様であり、日本人子弟を主として対象にする小学校と、朝鮮人子弟を対象とする普通学校に分かれていた。

異なる学校に分けられ、異なる教育を受けてきた、異なる民族の学生が、同じ模擬試験の場で、優劣をかけて激突する。つまり、この模擬試験は、個人と個人以上に、中学校と高等普通学校、そして何よりも日本人と朝鮮人が、各々のプライドをかけて激突する場であったのである。

それだけでも、容易に盛り上がりが予想されるこの模擬試験が、いっそう特殊な意味を持ったのは、言うまでもなくそれが、「第一回」であったことにある。時に、誤解されている日本統治下における朝鮮半島の教育制度であるが、そこでは義務教育は実施されておらず、「国語を常用する者」と「国語を常用しない者」の間では、全く異なる教育制度が適用されていた。その典型的な表れが、両者の教育年数の違いであった。日本統治が開始された当初、中学校が五年制であったのに対し、高等普通学校は四年制。従って、修業年限不足により、高等普通学校卒業者はそのままでは、大学に進学することができなかった。そのため、彼等は大学進学の為には、彼等を受け入れてくれない朝鮮半島の中学校ではな

く、内地、つまり日本国内の中学校に留学し、改めて大学進学資格を取り直さなければならなかった。当然のことながら、留学には多額の資金が必要であり、事実上、大学に進学できる朝鮮人は、限られた一部の極めて裕福な一族の子弟だけだった。

このような日本人と朝鮮人の間の極端な教育上の不平等が、ようやく少しは是正される時がやってくる。一九二二年、朝鮮総督府は「朝鮮教育令」（日本の教育基本法に相当）を改正し、高等普通学校の修業年限を五年に延長することにより、その卒業生にようやく大学受験資格が与えることになったのである。背景には、三年前に行われた「三一運動」があった。朝鮮総督府は、朝鮮人の不満を抑える一つの方法として、教育改革に手をつけた訳である。朝鮮総督府は教育改革の一貫として、前出の第一回模擬試験の実施と同じ一九二四年に、朝鮮半島初の大学である「京城帝国大学」の予科を開設することにもなっていた。模擬試験は、この大学予科開設の準備をも兼ねたものでもあったのである。

こうして歴史的な「第一回大学予科高等学校入学模擬試験」が行われた。ソウル市内の中学校と高等普通学校、つまり、京城中学校と龍山中学校、そして京城高等普通学校は、選りすぐりの秀才をこの模擬試験に送り込んで万全を期した。日本人側には、植民地の支配者としての自負があり、また朝鮮人側には、何とかこの試験において、常日頃、朝鮮人の劣等性を言い募る日本人の鼻をあかせてやろう、と考えていた。既に「模擬試験」は、もはや単なる本番の「模擬」以上のものとなっていた。

「稀代の秀才」の登場

そしてこの世紀の模擬試験の結果は、一人の朝鮮人学生の圧勝に終わる。少年の名は、兪鎮午（ユ・ジンノ）。京城高等普通学校の学生である。日本統治下におけるあらゆる試験がそうであったように、一〇〇％日本語で行われたこの試験において、兪鎮午は、見事首席を獲得した。しかもその勝利は完璧だった。兪鎮午は自信をもって臨んだ数学と英語のみならず、自らが「常用しない」はずの「国語」、つまり、日本語の試験においても、日本人学生を抑えて首席となった。朝鮮人は日本人より劣っており、だから植民地に転落することとなったのだ。常日頃、日本人から繰り返しそう聞かされ続けていた当時の朝鮮半島の人々に取って、それは文字通り、快挙以外の何ものでもなかった。こうして、一介の高等普通学校生は、たちまち民族の英雄となった。人々は彼の将来に熱く注目した。

そして、期待に応えるように、兪鎮午の快進撃は順調に続いた。彼は内地からの受験生をも迎えて行われた京城帝国大学予科の本番の入学試験でも文科 A、つまり高級官吏への道につながる法学科へのコースに、やはり首席の成績で合格した。しかも兪鎮午の成績は、単に文科 A でトップであっただけではなく、この年の京城帝国大学予科受験者全体の中でのトップであった。哲学科へ進む文科 B の首席も同じく朝鮮人であった。当時朝鮮半島にて発行されていた朝鮮語新聞は、この朝鮮人受験生たちの、快挙を大きく報じることとなる。

因みに、当時の京城帝国大学法学科の実質的な定員は、朝鮮人１：日本人３に固定されていた。入学試験でも日本人学生は大きく優遇されていたことになる。その意味で京城帝国大学は、朝鮮半島にある大学ではあっても、朝鮮人の為の大学ではなく、支配者である日本人の為の大学であった、という方が相応しい。しかしながら皮肉なことに、この実質的な朝鮮人定員の絞込みの結果として、優秀な学生には朝鮮人が多かったとも言われている。

兪鎮午の「秀才」ぶりは、大学入学後も変わることはなかった。彼は予科から本科を通じて、常に首席の地位を守り続け、卒業もまたトップの成績であった。時流に敏感な「秀才」らしく、この時代、彼は内地でも流行していたマルクス主義の洗礼を受けている。そのことは一九二〇年代には、内地にも朝鮮半島にも、依然、思想的に自由な空間が残されていたことを意味している。

当然のことながら、このような兪鎮午の「秀才」ぶりが、大学教員たちの目に留まらぬはずはなかった。ある日、ある日本人教員 ― もっとも、当時の京城帝国大学の教員は全員日本人であったのだが ― は、兪鎮午に、「君のような人物は、今すぐこの大学の教員になるべきだ」と述べたという。一学部生に対する言葉としては、正に破格であるとしか言いようがない。こうして、日本統治下の朝鮮半島において、官吏としての道を歩むことを潔よしとしなかった兪鎮午は、大学教員、そして学者としての道を歩むことになる。

しかしながら、兪鎮午の苦難はここからはじまった。何故なら、京城帝国大学の教授会は、一部教員の激しい抵抗を押し切って、「朝鮮人がこの大学の常任の教員になること」―より正確には、身分保障を持つ常任の教員となること ― を認めない旨の決議を行ったからだ。こうして朝鮮半島初めての「大学」である京城帝国大学は、皮肉にも最も優秀な第一期生の将来を、自ら閉ざすことになったのである。

兪鎮午は、法学科の教授たちの下で、任期制の助手職を更新しつつ、また予科のそれを中心とする非常勤講師を務める日々を余儀なくされる。自らより成績の落ちる日本人学生が次々と、各地の大学で職を得る中で、「稀代の秀才」のプライドは大きく傷ついた。

しかし、兪鎮午には、もう一つの顔があった。高等普通学校時代から同人誌を作り文学作品を執筆していた兪鎮午は、文学面でもその才能を十二分に発揮した。大学助手時代には、当時の二大朝鮮語新聞の一つ、朝鮮日報から小説執筆の依頼を受けるまでになっていた。この頃の兪鎮午の小説は、マルクス主義色が強く、たとえば一九三一年に執筆したこの時期の彼の代表作、「女職工」は、次のような構成をとっている。主人公は、体の不自由な父と幼い弟のために日本人が経営する製糸工場で働く一六歳の少女。彼女は、やがて、日本人経営者の理不尽な労働組合に対する弾圧に疑問を持ち、また疑問を持つことにより、自身も日本人経営者から陵辱を受ける。こうして苦難の中、少女は労働者意識に目覚め、組合運動に積極的に従事する、というものだ。

だが、兪鎮午が理不尽な環境に置かれた期間は、長くはなかった。「女職工」を執筆した翌年、兪鎮午は、京城帝国大学と同じソウルにあった「普成専門学校」（今日の高麗大学

の前身）の専任講師として正式に迎えられたからである。因みに、当時の「専門学校」とは、五年制の「大学」に対する、三年制の高等教育機関のことである。この普成専門学校は、延世大学校の前進の一つである「延禧専門学校」と並ぶ、朝鮮半島私学の名門であり、少なくとも朝鮮半島においては、その高等教育従事者としての待遇は、決して悪いとはいえなかった。

当時の普成専門学校校長は、東亜日報社主としても知られた朝鮮半島有数の大富豪、金性洙（キム・ソンス）。金性洙は、かねてから京城帝国大学で冷遇されている「稀代の秀才」に目をつけていた。金性洙の側近である東亜日報社長、宋鎮禹（ソン・ジンウ）もまた、兪鎮午に会い、彼を「朝鮮の吉野作造」と呼んで絶賛した。

プライドの高い「秀才」は、この「専門学校」に就職することを潔よしとはしなかった。兪鎮午は、自らの就職の「見返り」として、同じく京城帝国大学にて助手を務める同僚をも採用すること、各々の教員の個人研究室を設けること、本格的な図書館を建てること、研究成果を発表するための紀要を発行すること、等を要求した。兪鎮午は当時、僅か二六歳。朝鮮半島有数の大富豪であり実力者である金性洙を前に、これだけの「見返り」を要求した彼のプライドの高さは、驚きとしかいう他はない。

「金講師とＴ教授」

安定した職を得た兪鎮午は、恵まれた環境で、研究と教育、そして文学活動にいそしんだ。その成果の一つが先の就職から四年たった一九三五年に書かれた、兪鎮午が自ら認める代表作、「金講師とＴ教授」である。

主人公の金講師は、東京帝国大学を卒業した朝鮮人エリート。彼は卒業と同時に、自らが軽蔑していた日本人教授に膝を屈し、就職の斡旋を頼んで、総督府の某課長への紹介状を得た。金講師は、この課長の盡力により、官立専門学校のドイツ語講師としての職をどうにか得る。この明らかに京城帝国大学時代の兪鎮午自身を髣髴させる金講師は、同時に大学時代に「文化批判団」という左翼学生団体のメンバーであった前歴もあり、朝鮮語新聞にドイツの左翼文学運動の紹介文を書いて口に糊して来た人物でもある。彼は、このような矛盾に満ちた自らの人生を忸怩たる思いで過ごしており、その選択を生きていく為には仕方のないことなのだ、とどうにかして自分に言い聞かせようと努力している。

金講師は、この官立専門学校で初めての朝鮮人教員であり、校長や教員たち、さらには学生たちが、自らにどのような目を向けているかを気にやんでいる。そのような金講師にただ一人、気軽に、そして何よりも丁寧に声をかけてくれた人物がいた。Ｔ 教授である。朝鮮人である自らにも、丁寧に話しかけてくれる唯一の教員である Ｔ 教授に好感を抱いていた金講師は、ある日 Ｔ 教授が、自分が過去に「ドイツ左翼作家」に関わる論文を書いたこと、更には大学時代に「文化批判団」での活動を行っていたことを知っていることに気づく。

金講師の勤める専門学校には校長や T 教授を中心とする派閥と、それに対抗する派閥の争いがあり、共に朝鮮人である金講師に対して蔑視の目を向けると共に、彼を取り込もうと策謀している。T 教授は明らかに、金講師の過去をその為に利用しようとしており、そのことに金講師は嫌気をさし、彼らから距離を置こうとして孤立する。そして、疑心暗鬼に陥り、家に閉じこもる金講師にとって、遂に破滅の日がやってくる。T 教授から、校長や課長が自らに対して痛く気分を害している、という話を聞いた金講師は、遂には重い足を課長宅へ向けた。課長はその場で、金講師が「マルクス主義者」であることを隠して、自らに就職を斡旋させたことに怒り、罵った。自らはマルクス主義を研究したことはあっても「マルクス主義者であったことはありません」。こう反論する彼の前に、隣室から出てきたのは、いつものようににこやかな笑顔を浮かべた T 教授であった ― 。この最後のシーンは、最早、金講師が崩れ落ちるように、彼を囲む人々に屈服するしかないこと、そして、金講師がやがて彼等に媚び諂うようになるであろうことを強く示唆している。

兪鎮午自身も、やがて、この金講師と同じ境遇に追い込まれる。一九三〇年代後半以降の日本とその植民地である朝鮮半島を巡る国際情勢は、この天から豊富な才能を与えられた朝鮮半島の「稀代の秀才」にさえ、自由と安逸をむさぼることを許さなかったからである。より正確には、兪鎮午が「稀代の秀才」であったからこそ、朝鮮総督府は、彼の影響力と文才に目を付けた。総督府は、兪鎮午に日本語で総督府の政策に適った文章を書くように兪鎮午に要請し、彼はこれに従うことを余儀なくされた。

しかし、自らの意に沿わないものであろうとなかろうと、一旦、文章を書き始めれば、「秀才」は「秀才」であった。一九四〇年代に入ると、兪鎮午は日本の植民地支配や戦争遂行を礼賛する数多くの文章を発表する。朝鮮人の皇民化、総力戦の為の団結、「国語」教育と「国語」文学の重要性、そして内鮮一体（つまり内地と朝鮮半島が一体になること）の必然性。「秀才」兪鎮午は、この朝鮮総督府から与えられる課題を、どれも器用にこなしていった。

例えば、一九四四年、朝鮮半島での徴兵制実施について、兪鎮午は「徴兵制度によりまして朝鮮の若き青年達は皇軍の一員として決戦下日本の国防の一端を担って立つことになりました。このことによつて従来の朝鮮における総ての問題に対して終止符が打たれたのであります」と述べている。その文章は、あたかも、「朝鮮半島における徴兵制度導入の意義を述べよ」という、模擬試験の問題への模範解答のようにさえ思えてくる。

大韓民国におけるエリートとして

「秀才」であるからこそ、時代の潮流の変化と共に、自らの過去がなかったかのように、どのような時代の、どのような要請にも、模範解答をもって対応できる。そのような兪鎮午の「秀才」ぶりは、太平洋戦争における日本の敗北により、朝鮮半島がその長い植民地支配から解放された後も、変わることはなかった。

朝鮮半島から、日本人教員たちが逃げるように帰国した後、兪鎮午は、朝鮮半島における事実上、唯一の憲法学者としての地位を獲得し、新たなる独立国「大韓民国」の憲法策定にも携わった。兪鎮午の下には、様々な政治勢力から、自らが有利になるような憲法草案を書いてくれるようにとの依頼が殺到し、結局、憲法を制定する為の国会には、異なる二つの政治勢力の依頼を受けて彼が執筆した、二つの「兪鎮午案」が上程された。兪鎮午は、文学作品のみならず、憲法さえも、依頼に応じて見事に書き分けて見せたことになる。兪鎮午が作った憲法は、九度の修正を経た今日でも、韓国憲法の重要な骨格の一部になっている。憲法確定後は、初代大統領李承晩の下、兪鎮午は初代法制処長（わが国の内閣法制局長官）に就任し、独立したばかりのこの国の法的基盤を作り上げた。因みに、李承晩は、兪鎮午の大学における庇護者である金性洙等とは、激しい政治的対立関係にあったから、「秀才」はこの当時の韓国の二大政治勢力の間を、巧みに泳いだことになる。

解放後の兪鎮午の活躍は、法学者としてのみならず外交分野にも及んだ。日韓交渉でも度々韓国代表として起用された彼は、国連や国際赤十字等の国際舞台においても、得意の法律的知識を利用して、その「秀才」ぶりを何如なく発揮した。

そして、「秀才」は、最後には政治にも手を染めた。一九六一年、兪鎮午は朴正熙等一部軍人によるクーデタ直後が勃発すると、このクーデタ勢力が推進した「国民再建運動本部」の本部長に就任した。「国民再建運動」とは、朴正熙等が韓国人の「民族正気」を取り戻す為、と称して行った運動である。この運動は、明らかに日本の「翼賛国民運動」から影響を受けたものであり、そこには嘗て日本陸軍士官学校を卒業した「親日派」（韓国では日本の植民地支配に協力した人々をこのように呼ぶ）朴正熙の思想的傾向が如実に現れていた。一部では、ここから進んで、この朴正熙等が、同じ「親日派」であった過去を持つ兪鎮午をクーデタ勢力によって大統領に担ぐという噂さえあった。後に兪鎮午は自身、この噂について「根拠がない訳でなかった」と記している。

しかし「秀才」は老いても時流には敏感であり、その身のこなしも軽やかだった。一九六五年、高麗大学校総長を退いた兪鎮午は（彼はこの間も一貫して高麗大学の教員を務めている）一転して野党の民衆党の、朴正熙に対抗する大統領候補者として迎えられた。結局彼は、翌年には、「野党勢力統合」の美名の下、もう一つの野党であった新韓党の党首、前大統領尹譜善に大統領候補を譲ることになるが、代わりに民衆・新韓両党が統合して作られた新党、新民党の初代党首に就任した。「今回」の大統領選挙を譲って、「次」に備えたことになる。当時の憲法は、大統領の三選を禁止しており、一九六三年と一九六七年に続く、一九七一年の三回目の大統領選挙には、朴正熙が立候補できない可能性があったからである。

そして、一九六七年、尹譜善が大統領選挙にて朴正熙に「予想通り」大敗すると、兪鎮午はいよいよ野党の大統領候補の大本命へと浮上する。「稀代の秀才」兪鎮午 ― 。彼は、遂にもう少しで大統領の座が手に届くところまで登り詰めた。

しかし、一九六九年秋、兪鎮午は突然、大統領への道半ばで、挫折を余儀なくされる。

長く厳しい与党との闘争に疲れた彼は、遂に病に倒れ入院する。この後、兪鎮午は東京に渡って闘病生活に入る。この彼に代わって野党の大統領候補者になるのが、後の韓国大統領、若き金大中であることはよく知られている。

兪鎮午は一九八七年まで生きた。彼が死を迎えた八七年は、奇しくも韓国が長い権威主義的体制から民主化された年のことである。数多くの日本人中学生を打ち負かして、ソウル一の「秀才」として世に出た少年は、既に八一歳になっていた。

最後に大事なことを付け加えておこう。日本による植民地期活発な文学活動を展開した兪鎮午は、解放後は、随筆を除く文学作品の執筆からは距離を置いた。それが、巷間言われるように、自らが日本統治末期に書いた文章の、あまりの内容に嫌気をさしたからなのか、それとも自らが書いた小説の主人公に似すぎていたからなのか。そもそも何時の時代も、「模範解答」を出しながら彼の人生のどこに間違いがあり、彼がこの激しい韓国現代史を生き抜くには、他にどのような術があったのか。

兪鎮午がこの世を去った今、その答えは、あの「金講師と T 教授」の金講師に聞いてみたほうが良いのかもしれない。